

*「津波のあと、何が困ったかっていったら、そりゃあ、タオルがなかったことさ～」
手を拭こうにも、何をしようにも何も持たなかったもんねえ。

*避難所では、はじめの2日間は何も口にできず、
3日目にもらったのは、こぶしの半分位のおにぎりだったよ～。
人間ひもじいと人が変わるもんだな…。

*お父さんと長男の嫁さんが流されて、7人家族が5人になってしまった。
息子たちはマグロ船に乗ったりしてるから、これまでも家族はバラバラに生活してたけど、
前のバラバラと、今のバラバラは違うな～。全然違うなあ～。

陸前高田市の公民館での「お茶会」で伺った話です。
ほとんどが70～80代の女性たち、仮設住宅で生活を始めたばかりの方たち。

仮設に閉じこもりにならないように、社会福祉協議会が送迎バスを出して
公民館に30人40人と集まってもらう活動メニュー。
社会福祉協議会職員に、全国各地から応援の専門職が支援チームを編成、
動き始めたところといいます。

この日は、神戸市保健所、理学療法士会、福井市社協、日赤など13名ほどと現地社協スタッフ、
プラス 遠野ボラセンから私たち傾聴ボランティアが2人。午前午後1箇所ずつのお茶会開催。

血圧測定にリハビリ体操、タオルを使った簡単手芸で手を動かしてもらい、
おしゃべりとお茶で、少し息抜きをという3時間ほどのメニューですが、
一番の狙いは、健康状態の観察と仮設住宅での孤独の防止。

同じ集落同士での仮設入居はなかなか難しいようで、当たればラッキーなのか…
それでもこうして出れば顔見知りとも行き会えるし、消息を尋ねあうようすもあって、
安堵の声や笑いも混じって、その効果は間違いなく大。

午前中の会場には、町内会長さんも参加。
前夜に激しく降った雨で仮設近くの池が溢れそうになったため、
夜中まで土嚢を積んだ話を集まった方たちに、聞かせていらっしやいました。

社協の保健師さんは「ともかく喋り合ってもらうためにも、これを続けなくちゃいけないんで
力まず気負わず、淡々とおしゃる姿には説得力がありました。
私たちは、ただただ聴くことを心がけました。

早朝に西尾を出てから、新幹線で、新花巻まで7時間。
JR釜石線に乗り換えて1時間で、ようやく遠野市へ。
駅から25分の遠野市福祉センターで、夕方5時からのミーティングに参加。

翌日は、川崎市から来ている人とふたりで1時間半かけて陸前高田へという
ボランティア初日でした。

2日目は晴れ。遠野を8時に出発。釜石市経由で大槌町へ。

釜石市内は、駅前周辺だけはスーパーの仮店舗も建つなどしていますが、目抜き通りの商店街は、1階部分のほとんどが壊れたままでゴーストタウンのよう。信号も止まったまま。大きな交差点のみ、警察官の手信号通行が続いているといえます。

役場と町長さん以下課長級の職員全員が津波で流されてしまった大槌町。15000人余の人口のうち亡くなった方が777、行方不明者が950人余といえます。釜石から30分ほどかけて着いた町中は、本当に人っ子ひとりいない感。

陸前高田でもそうでしたが、瓦礫処理のショベルカーがもくもくと動くばかり。津波で流された家屋は土台を残すだけで、後は、積み上げられた瓦礫の山がそこここに。町の中は、家屋の解体も進み、何も無い…ただただ広いばかり。

この日の大槌町での作業は、県立大槌病院を横に見ながら、着いた安渡地区の住宅地で、草取りと瓦礫の片付け作業。別動チームは墓地の参道の草取りと瓦礫の運搬。私は、60坪ほどの民地に7名で入り、5時間ほどかけて整理をしました。驚いたのは、あらゆるところに細かな細かなガラス片が散らばっていること。当然といえば当然のことながら、瓦や木片とは違うショック。全員黙々と作業しました。

3日目は、トラック（大分県生協から）で再び大槌町へ。
仮設住宅に、下駄箱やレンジ台、電子蚊取りを配達しながら、
困りごとがないか、手伝うことはないか…聞き取りの仕事です。

町全体で2000戸の仮設を建てる予定で、1900戸までは建ったそうですが、
入居は始まったところのよう。
報道されるように、なかなか集落単位での入居とはいかないようで当選しても入らない人もいる

午前中は雨のため、物資倉庫になっている大槌北小学校でレンジ台の清掃。
（津波を被った木材の使える部分でこしらえた下駄箱やレンジ台です）
小学校は2階まで浸水。汚泥は取り除いてありましたが、損壊が激しく、
一部倉庫にしている教室を除いて立ち入り禁止。当分開校の見込みはないとのことでした。

午後雨模様のため、蚊取り線香だけを配達することに。
股関節がわるくて座れないというおばあちゃん宅におじゃましましたが、
玄関を入ると、すぐ台所。ガス台と流し台のみの2畳ほどに奥は3畳で、
ベッドとTV、小さなちゃぶ台で一杯いっぱい。
身寄りも近くにはいないため、
病院に予約はしているものの、どうやって行けばいいのか途方に暮れているとの訴え。
お風呂に入る補助具も欲しいとのことで、同行の保健婦さんにつなぎました。

*「ハエがいっぱいいるが、釘を打ってはならんというので、ハエ取り紙もつるせない」と怒る
身体が不自由そうなおじいさん。
つるせるところをみてくださいかと聞いて、「そんなところはないわ!」と、ご機嫌なな
→どうして釘をうちやいけないんだろ!? 西尾に帰ったら、どうしてか聞いてみよう!
とりあえず、
次に訪問する時にガムテープかなにかで何とかするように頼んでおこうとメモ。

*「いろいろ不満はあっても、役場をいじめちゃいけないよ。役場の人たちは、よくやっ
てくれている。壊れそうになっている人も大勢いるだろうに頑張ってるんだもの。
ここで私らがこれ以上言っちゃあいけない。あの人がたが参っちゃったら、本当に困るのは、
私らなんだからさ。」
→困りごとはありませんかと尋ねたら、逆に、真に役場を心配する7代のおばあさんの言。
この話も、保健婦さん経由で役場に伝えてもらうべく報告書に書き込み。

あっという間に帰還時間になってしまう1日でした。



▲釜石市鶴住居町にて



▲崩れた堤防～両脇に階段が残されている

被災から5ヶ月。生活は避難所から仮設住宅に移り、第2段階に入っています。相当な長期戦になることは間違いなく、支援は、避難所を中心にしたポイント箇所だけでなくなるわけで、これまでよりもさらに難しい部分が増えるのではないかと思います。

大槌町の場合、仮設住宅団地は48か所にもなるといいます。私は入った場所は、町の中心部から4キロほどの処と、さらにそこから2キロほど山に入った処。バスは、すぐ横の県道を日に4便ほど走るようですが…。

「48か所を巡回するバスを走らせてほしい」との要望が聞かれました。これに対して、日赤から出向の職員さんは「出来るだけ応えたい。」と言っておられましたが、孤立化、もっといえば、孤独死を防ぐためにも必須の事業だと思います。

当面は、NPOなどが担うのが早そうですが、住民の雇用の場と考える必要もあろうと感じます。地元の人が運転手なら、乗る人の顔も判りますものね。

町長選挙は

8月末に行われる予定とのことで、それを待たないと

大きな決定はできないのかも知れませんが、

これからの支援策で重要なのは、地元での生活をつくっていくことでしょう。

地元のタクシー会社に

マイクロなり、ジャンボタクシーなり確保して運行してもらおう…なんて、どうだろう…

合併して、市域が倍になった西尾市の「バスを走らせてくれ」の要望とダブります。あれこれ考えてしまいました。

また、住民の間では、誰がどこにいるか、

どの仮設に入ったかという情報は定かでないようです。

これから戸別の調査も行われるようですが、入居者にとっては重要な情報のはず。

今はツテを頼って、探し捜して…の感。

たまたま、聞き取りをしているお宅に、知り合いが見舞いに尋ねてこられ「やっと見つけた、無事でよかった」と手を取り合っておられました。

個人情報はどう扱うかの難しさはあるでしょうが、何とか良い知恵を出してもらいたいと切に思います。

外から勝手なことを言うのは憚られますけれど、これが自分の町のことだったら・・・と思うと考えずにはられません。

3月11日、地震対策本部を庁舎前につくろうとしていた最中、津波に襲われ、町長以下、課長級の職員が流され副町長が復興の指揮を執ったものの任期満了。その後を担ったのは、主任級の方と聞きます。130人余の職員も30数名が亡くなられたり、行方不明だったりですし、役場本体もデータも何もかも流されたなか、最善の努力が続けられていることに心から敬意を表します。

各地から支援職員が入っていますが、お盆前からは、保健師による仮設住宅入居者への調査が始まっているそうですが、私が聞いた8月はじめの時点で、応援保健師は8人ほど。1900戸の調査に、この人数は厳しい数字です。

西尾市からも、愛知県経由の派遣で保健師が入っていましたが帰還。お盆明けから、次の派遣が予定されていたのですが、愛知県は撤収するとのことで、派遣されないことになったようです。これらの決定は、岩手県と愛知県とのやりとりなのかどうか、よく判りませんが、現地の個々の自治体の状況が、きちんと反映されているのか、非常に気になります。

10万人規模で投入された自衛隊は、お盆前にどの県からも撤収し、避難所もほとんどが閉鎖される見込みといます。緊急の、命にかかわる部分での救援活動は、一区切りということなのでしょうが、本当に大変なのは、これからと言えましょう。物流網は序々に回復しているようですし、物資は届いていますが、拠点まででしかないように見えます。避難所にいれば衣食住の支給はありますが、離れば無くなります。仮設住宅に入れば、「自立したとみなされる」とききますが、本当にそう言えるのか、半壊でも、自宅にとどまる人たちへの支援はどうなるのか。

被災地によって、支援がたくさん入っている処とそうでない処の格差が目だってきているとの新聞報道を見るにつけ、「コーディネート」がうまくいく方策はないものか、この震災をわが身と思う動きをどうやってつくったらよいか…。

「気がついたら、声にする」、そう考える人を、ともかく増やしましょう。